

「佐倉市とその周辺の女人講石造物」

蕨 由美

(1) 石造物で探る北総の女人講

1. 北総最古の女人主体の石塔

香取市貝塚の来迎寺境内の個人の墓地内には、善女人10余人が二世安樂を願って「三年一座」の「守庚申」の庚申行事を行った主旨の銘がある**天正4年(1576)銘の宝篋印塔**がある。(*1)「善女等」の銘から、女人講の石塔としては、現在、最古とされ、平成27年7月に香取市文化財に指定された。

2. 「女念仏」から十九夜講へ多様な展開

北総の江戸前期と中期の女人講の石造物の主流は、如意輪観音像を刻む「十九夜供養塔」であるが、つくば市北条新田の江戸初期の**寛永十年(1633)の十九夜塔**などでは「十九夜待」ではなく、「**十九夜念佛**」と刻んでいることから、十九夜塔は月に一回、十九日という日(夜)を決めて念仏の集まりを行う「念仏供養」塔であったと推測される。

江戸前期の女人講は、十九夜念仏に限らず、十五夜など十九夜に限らない「女(房衆)念仏講」が主流で、地蔵菩薩などさまざまな主尊を拝み、また庚申講でも主体的な役割を果たすこともあった。

万治元年(1658)の船橋市本町の地蔵像塔は、「さんや村」の「**念仏講中間拾貳人同女人十六人**」が造立にかかわったこと、また**寛文10年(1670)の八千代市米本の地蔵像塔**も「**女房衆念仏講同行二十三人**」の銘があり、安産子育ての地蔵として伝えられてきた。佐倉市内でも江戸初期の同様の優れた地蔵石像として、**慶安3年(1650)建立の先崎の地蔵坐像**があり、「庚申」の銘から庚申信仰の証しとされ、「女人」銘や女性名はないが、「子育て地蔵」として女性たちに篤く信仰されてきた石仏である。

一方、香取市南下宿善光寺には、**万治3年(1660)の宝篋印塔**と**天和3年(1683)の笠塔婆**には、「**日念佛衆**」として百名以上の名が刻まれていて、半数以上は女性の名前である。また、香取市小見川の**正福寺の元禄3年(1690)六地蔵文字塔**には、「**奉安置六地蔵塔廟二世安樂所 堂前女坊(房)衆同道十三人**」と13人の女性名がある。

佐倉市土浮**正福寺**の如意輪観音像塔には「**奉新造立時念仏并拾九夜供養・・**」と彫られていて、**元禄4年(1691)建立時**でもまだ「時念仏」と未分化であった。

また「女念仏講」による造立では、**船橋市不動院の元禄14年(1701)銘の六観音を六面に浮き彫りした石幢**があり、「**奉新造六観世音 女念仏講為二世安樂**」と六観音の浮彫りの下には、「**獵師町横丁 不動院月栄代**」それ以下に、「**妙真・妙案**」など出家した尼と思われる法名が19名、「おふう・おい女・およし」などの女性の俗名20名が刻まれている。

佐倉市生谷梵天塚脇の念仏塔 **元禄16年(1703)**も「**奉造立聖如意輪観世音／尊像惣(村)／為女念仏講菩提也・・**」の銘から「**女念仏講**」の建立である。

江戸時代の初期、ムラには、共同体の二世安樂を祈る念仏読誦の講が盛んであり、女人講はその中心であったと思われる。

3. 十九夜塔の盛隆

茨城県側の利根川対岸では、**万治元年(1658)如意輪観音像**を線彫りした「**十九夜念仏**」塔が**利根町徳満寺**に造立された。

千葉県側でも**万治4年(1661)銘の「(サ)奉寄進十九夜待」**の銘文の下に**14人の女性名**が刻まれた**板碑型文字塔**が香取市長岡の**観音堂**に建立されるが、この塔は女人講であることが明記された千葉県で初めての十九夜塔である。

一方、佐倉市内臼井台**実蔵院**の**如意輪観音像**の十九夜塔は**寛文9年(1669)**男女による建立であるが、台座には多数の女性名が刻まれている。

寛文年間には浮彫や丸彫、六臂や二臂の多くの如意輪観音像が十九夜塔として建てられていき、江戸前期から中期のころ、女人講の石塔として如意輪観音像を刻む十九夜塔は、関東北東部を席卷(*4)し、北総では、江戸前・中期(17~18世紀)で1500基、幕末までには二千基もの十九夜塔が建立されていった。なお、二臂像の像容では、左手を膝に下げたポーズから、左手に蓮華を持つ姿に変わっていく。

十九夜塔建立主体の十九夜講では、「十九夜念仏和讃」を唱えた。これは、毎月十九日に集まって、十九夜念仏を唱えれば、血の池地獄に落ちた女人を如意輪観音が救済してくださるという内容である。「血の池地獄」とは、「血盆経」という室町時代に中国から伝来した差別的な偽経に出てくる地獄のことで、月経とお産で流す血の穢れから女性が逃れられない恐ろしい死後の世界とされる。(*3)

当初の十九夜講は、ムラとイエの現世安楽、来世での先祖、特に女人救済を祈願する「十九夜念仏」の性格も強かったが、江戸後期には、安産子育ての現世利益を祈願する性格が強くなり、やがて「子安講」へと移行していった。

4. 子安講の石造物

安産・子育て・子授けを祈願する女性の子安講が建てる子安塔は、「子安大明神」銘の子安石祠と、主尊が乳幼児を抱く像容を刻んだ子安像塔に大別される。

千葉県内で最古の子安塔は、元禄4年(1691)の袖ヶ浦市百目木子安神社の「子安大明神」銘子安像塔、である。(*4)。

北総では、元禄16年(1703)の八千代市上高野子安神社の「子安大明神」文字銘の石祠が古く、子安石祠が子安像塔にやや先行して現れる地域も多い。

後者の子安像塔は江戸中期後半から普及し始め、「子安大明神」銘のほか、「十九夜講」や「子安観音」銘が見られるようになる。

佐倉市での子安像塔の初出は、内田妙宣寺の宝暦6年(1756)銘。また大佐倉麻賀多神社の天明3年(1783)は「子安大明神」銘、井野千手院の寛政3年(1791)は「十九夜」銘で、それぞれ子安像を浮彫りする。

江戸後期には、さまざまな像容の子安像塔が建てられ、幕末から近代になると、十九夜塔に代って、印旛・東総地域の女人講石造物のほとんどを占めるようになる。

現在も佐倉・八千代市内では、造塔が行われているが、東葛地域では、市川以西の江戸川流域での子安塔建立はほとんど見られず、船橋市古作町熊野神社の明治20年(1887)子安像塔が最西端である。

(2) 石塔にみる近世のムラの女性たち

1. 男女が対等であった江戸前期の石塔建立

ムラの講による石塔造立が行われるのは、ムラの生活が安定した江戸前期の万治のころ(1658～)からであるが、そのころから中期前葉の元文のころ(1740)までの石塔には、結衆した多くのムラ人の名前が列記されていて、念仏講や女人講関連の石造物では、「おとら・おくら」などの女性名の列記も多い。

また、男・女別の講が同年同日にペアで石塔を建てることもこの時期の特徴である。

八千代市吉橋の尾崎では、寛文8年(1668)十月十日、台座に「なつ・まつ」など16人の女性名のみ連記した日記念仏塔を建立しているが、この同年同日には、男性名18人列記の勢至菩薩像を刻んだ二十三夜塔も建立されている。

元禄5年(1692)、同じく吉橋の寺台でも、男性は二十三夜塔を、「おとら・おたけ」などの30人の女性は聖観音像の日記念仏塔を造立している。男・女それぞれ別の講を構成しつつも、信心業の証しとして造塔の事業を同時に営んでいることは、当時のムラ内の女性の地位を表しているといえよう。

また、八千代市萱田では、寛文9年(1669)の「二十三夜講」と「日記念佛」の趣旨の銘を、三層塔の塔身に面を替えて刻み、それぞれ男女別に名前を記している。その「おつる・おこう」など24人の女性名列記の前には「一結施主 女中衆」とあり、女人講の成立がうかがわれる。

このように、一つの石塔の別面に、男女別に名前を列記する例は、同市萱田の延宝元年(1673)の庚申塔でも見られ、この笠付角柱型塔の右面に「およし・おきく」など女性33人、左面には男性15人、正面に僧など3人の名が刻まれている。萱田では、いずれも男・女それぞれの講が共同して、これらの供養塔を建立したのであろう。(*5)

2. 平等に供養された女性のお墓

八千代市麦丸には、江戸時代を通じて営まれ、墓地整理などの改変を受けていないマイリ墓がまだ残っており、2016年に八千代市郷土歴史研究会の有志と、麦丸のセイマイマエ墓地の墓塔全数の年銘、戒名の位号、形態、像容にわたって調査を行った。その塔数は173基、被供養者の人数は総計200名で、年銘による時代区分と位号、それによる男性・女性・児童の別について分析を行った。

その結果、麦丸での墓塔の造立は、寛文・延宝期から造立が盛んになり、1700年代(元禄13年～宝永～正徳～享保5年)が最も多く、1760年～1780年代(宝暦10年～明和～安永～天明～寛政)に数に陰りが見え始める。1800年代(文化・文政)に回復するよう見えるが、そのころは童子・童女という子供の位号が増えて、その分さらに大人の信士・信女銘の墓塔数は減っていくことになる。

江戸後期に童子・童女の位号が増えるのは、幼少時の死亡が増えたわけではなく、人口停滞期で少子化が進み、それだけ子供が大切にされ、子供の死を悼んで手厚く供養するようになったからであろう。

また大人の位号は、ほとんどが信士・信女で幕末までかわらず、近現代に多く見られる居士や大姉は

ない。例外的に2例ほど院号がつく信女の墓塔があるが、それ以外にムラの人々の間の階層化は見られず、極めて平等である。

また信士や禅定門の男性位号より、信女・禅定尼の女性位号がやや多く、男女間の差がないのはもちろん、如意輪観音像塔の多さや院号がつくなど、女性に対する供養のほうが丁寧であった。(*5)

3. 江戸時代後半～近代、消えた石塔の女性個人名

江戸時代前期から中期前葉までの女人講関連の石仏の裾部や蓮台には、仮名書きの女性名連記が多くみられるが、中期後葉からは、建立年と建立に関与した人名は、本体の右・左面に記され、台石に村名と「女人講中〇〇人」「同行〇〇人」などの銘が刻まれる。人名は、「世話人」2～3名が多く、「〇〇エ門」や「〇兵エ」などの家名(いえな)となり、女性の個人名列記はなくなる。十九夜講や子安講など女人講がムラの講として組織的に定着し、供養塔造立の費用や手間も、ムラ単位の事業として確立したからであろう。

後期も、女人講関連の石造物での女性個人の名前が記されないが、まれに、家名に「内」「母」「妻」を付して表記される事例が見受けられる。

文化9年(1812)の印西市押付水神社の普門品供養塔では、本体と台石に近隣の村を含む117人の人名中、24人の女性が、「伊蔵妻」など「妻」銘や「庄右エ門母」など「母」銘が記されている。

八千代市萱田町の万延元年(1860)銘の女人講奉納の手洗石には、53人の人名中35人の女性名があり、それは「青木市良左エ門妻・中臺武右エ門母」という固有名のない表記であった。

宗門人別帳でも、妻は「誰々女房」とだけ記して名前が省略されている例も多く、女性は結婚すると、夫の付属物として領主から把握され、固有名詞は無視された時代であったと推測されるが、同時にイエ制度が確立していった時代ともいえる。

(3) ムラの女性たちの役割とは

1. 女人講は「女人成仏」への切ない祈りか？

伝えられた「十九夜念仏和讃」からは、不浄ゆえにおとされる「血の池地獄」から逃れ、「女人成仏」を求める女性たちの悲痛な祈りが伝わってくる。お産での死亡者はさらに救われ難く、「流れ勧請」のような呪術的な民俗行事も戦前まで行われていたという。

また山岳密教系の霊場の多くは修行を妨げるとして「女人禁制」であり、女性は「罪深き五障三従のあさましき身」(「蓮如上人御文」と仏教的にも蔑視され、さらに封建制度の中で大家父長制下では家内奴隷のように扱われ、「女大学」などのように儒教的な支配下にあったといわれてきた。お施餓鬼で絵解きされる地獄絵や「十九夜念仏和讃」の世界を、いったいムラの女性たちはどのように見ていたのだろうか。

しかし、江戸前期の石造物から見ると、ムラの中での女性たちは一定の役割を持って共同体の一員として活躍し、男女の差もなく遇されていた。農村・漁村・町場の庶民層の女性たちは、男性に劣らずよく働き、その主婦権は、一部上層の家の婦人とは比べようもなく強固であった(*2)という。

中世仏教的な念仏講の中でも、女性たちは主体的であり、ムラ社会の中で女人講の結束は一目置かれ、ムラの大事業であった石塔建立では対等の地位が与えられていた。

文化文政期ごろからは、「女人成仏」のドグマのから解放を求めるように、神道系の祭祀であった子安神信仰を取り入れて「子安講」へと脱皮していく。産み盛りのヨメは、イエと地域から子を産み育てることを期待され、さらに、子育てを終わると「卒業記念旅行」として、秩父巡拝の旅を共にし、さらに結束を深めていった。

2. 秩父巡礼に出るたくましい幕末の女性たち

佐倉市宝金剛寺には、天保6年(1835)から明治31年(1898)まで5基の秩父巡拝塔がある。そのうち天保6年塔には、「秩父同行三十二輩／直弥村願主利右エ門妻／同村五人／寒風村六人・・・」の銘があり、近隣六か村三二人が誘い合って、秩父詣でをはたしたのであろう。

さらに、弘化6年(1849)塔には、「米戸村 市右エ門母 源右エ門母 直弥村 新七母」など七か村一六人の「母」たちと、「下勝田村重右エ門隠居」の一七人が列記されている。(*7)

佐倉市近辺などの一部地域の女人講では、子安講と共に、秩父三十四観音霊場を巡拝する秩父講が、子育ての終わった世代で盛んになる。

早くは、江戸中期の明和2年(1765)、四街道市吉岡福星寺に「秩父坂東同行十一人」銘如意輪観音像塔が、翌明和3年には、佐倉市臼井台実蔵院に「奉造立秩父三十四番女人為二世安楽也 臼井墓町女講中」銘の聖観音像塔が建てられ、特に嘉永から幕末までに、佐倉・四街道市内では約三十基の秩父塔

が相次いで建立されている。

この地域に多い中年男性の出羽三山講の「奥州まいり」に対応するように、秩父や坂東の観音霊場の旅に出かけて行った中年女性たちの姿には、固有名のないこの時代の女性名表記とは対照的な、能動的なたくまじさが感じられる。

3. 「女人禁制」の富士への挑戦と「女人講中」銘「小御嶽」石塔

八千代市下高野の福蔵院の裏山に上には嘉永2年(1849)建立の「仙元宮」石祠が、富士塚を模した急な登拝道の中腹に「小御岳 石尊大権現 大天狗 小天狗」銘の文久2年(1862)建立の石塔があり、そこには「女人講中」の銘が刻まれている。石尊大権現を祀る小御嶽神社は、富士山五合目にあり、富士信仰と一体であった。

この石塔建立年の前々年の万延元年(1860)は、富士山出現の「庚申」の御縁年にあたり、本来、富士信仰の元祖・食行身禄は、女人禁制に対して反対の立場で、男女平等を説いていたことから、この年、富士山では女人禁制が解かれて女性の講員の登頂が認められた。埼玉県杉戸には実際に女性が登頂した記念碑が、また鳩谷には文書史料が残されている。(*8)

女性の登山は古来、二合目の小室浅間神社まで、江戸期では御縁年の庚申年でも四合五尺の御座石仙元社までとされていたが、中には男装して登頂を試みる女性もいたという。万延元年の解禁時に、佐倉や八千代市近辺の女性が実際に富士登山を行ったかは不明であるが、この女人登山解禁のイベントは、御師などのPR用の木版画や魯文の滑稽本などにも取り上げられて喧伝されたことから、幕末の関東のムラの信心深い女性たちにとっては大ニュースであったと思われる。

足利富士浅間神社は、上の宮と下の宮の二社から成り、上を男浅間、下を女浅間と称し、下の宮では「小御嶽」碑が崇拝されている。下高野でも登山道中腹に配された「小御嶽」石塔は、頂上の「仙元宮」に対して、女性が登拝する「女浅間」の石塔として建立されたのであろう。

4 ムラ儀礼の一翼を担った女人講

江戸前期の念仏講では、ムラの女性たちが石塔建立などの一翼を担っていたことがわかるが、現在に伝わるさまざまなムラの祭礼行事でも、女性たちの役割があった。

田植えに際しては若い女性たちが「早乙女」として出だし、各イエの祝い事では子安講の女性たちが「ハナミ」を歌いにいき、「テントウネンブツ」やトムライ、追善行事では念仏講の女性たちが念仏を唱えにいくなどの役割を、つい最近まで果たしていた。

女性たちは、イエ制度の確立によってイエに付くものとなったが、それ以前、ムラ共同体において、その祭祀を司る重要な役割があったと思われる。古代の伝統をひく有力氏族の神社では、「斎女(いつきめ)」が神に奉仕していたほか、沖縄諸島では「ノロ」や「根神」と呼ばれる神女たちが祭祀を司っていた。女性の持つ霊力が、ムラ共同体を守っていると信じられてきたのであろう。

17世紀半ば、近世の村が成立して、ムラ共同での石塔造立が可能になったころ、女人講の供養塔も遅れることなく建立されていることは、女性の集団での力がムラ内で評価されていたからに相違ない。

「女性は原始太陽であった」(平塚らいてう)名残を、江戸期のムラ社会に見出すのは難しいように思っていたが、女人講の姿を石造物の調査から探ることで、ムラの安泰を祈ってきた女性たちの役割を多少でもつかめたのではないかと感じられてきた次第である。

参考資料：

- *1 早川正司 2013「小見川来迎寺の天正銘宝篋印塔」『日本の石仏』145号 日本石仏協会
- *2 西海賢二 2012『江戸の女人講と福祉活動』 臨川書店
- *3 榎本正三 1992『女人哀歓—利根川べりの女人信仰』 崙書房
- *4 石田年子 2015「下総地方の十九夜塔」『日本の石仏』153号 日本石仏協会
- *5 蕨由美 2010～2012「北総の子安像塔の系譜—江戸時代中期におけるその出現と成立について」他『房総の石仏』第20～22号 房総石造文化財研究会
- *6 蕨由美 2002～2017 『史談八千代』27～41号 八千代市郷土歴史研究会
- *7 蕨由美 2018 「北総の女人講関連の石造物にみる女性名表記の変遷」『房総の石仏』第27号 房総石造文化財研究会
- *8 竹谷 靱負『富士山と女人禁制』2011 岩田書店